（ＳＡＭＰＬＥ）

警察イヌ娘　功績を称えられ繁殖イヌに選ばれる

イヌ娘――ヤマイヌ（狼）のような獣耳と尻尾といった形質を持って産まれてきた女性たち。その多くは脚力や嗅覚などに人並み以上の力を有し、古来、狩猟や守衛に従事してきた。今では、警察や消防、スポーツ、介護など。その活躍の場は只人と同じく多岐に渡る。

イヌ娘の存在が、社会の発展に大きく寄与してきたことは言うまでもない。

ゆえに、その優れたる血統を遺すことは重要だった。

現代、その意義は薄れたものの、秋霞（アキカ）は、要請書が来たとき、当然だとは思った。

秋霞は警察官である。長い黒髪をなびかせて、時に高い身体能力で凶悪犯を追い詰め、時に鋭い嗅覚で行方不明者を発見し……と、この五年間で解決した事件は数えきれない。事件から事件へ、颯爽と駆け抜ける様は黒疾風（くろはやて）と渾名するに相応しい。表彰だって七度も貰っている。母も災害救助で活躍したイヌ娘だった。

未来遺伝子研究所からの要請書は、その多大なる功績と偉大なる血統は云々という褒め言葉から始まり、血統保存を求む旨で締めくくられていた。すなわち遺伝子情報および卵子の凍結保存の要請である。

任意となっているが、断る者は少ない。

それは、とても名誉なことなのだ。

秋霞に思うところがあるとすれば、昨年、同僚の男性と結婚し、子供の話もまだなのに卵子保存というのは、なんだか……といったところだが、

「え、凄いじゃないか！」
夫の、その一言で決心がついた。
（そうよね、母も、先輩も、したことだし……）
それから二週間後、彼女は最寄りの専門機関へ足を運ぶことにした。

◇

検査の後、問診があるとのことで、秋霞（アキカ）はしばらく待たされた。
診察室のドアは二重扉となっていて、最初の扉を閉めると次のロックの外れる音がした。
（なんだか変わってるわね。上は普通の病院だったけれど、地下のこのフロアは丸々、それ用みたいだし）
秋霞は二つ目のドアを開けてすぐ、その異様に気付いた。手前のほうにこそデスクと椅子があるが、奥のほうにはベッドがあり、ピンク色の明かりに照らされ、まるでラブホテルのよう。だが異様というのは、そのことではない。ベッドの上で全裸の男とイヌ娘が交わっていたのだ。横向きに寝かされた女は片足を高く上げ、その股の間に男が腰を打ち付ける側位の体勢。
だから彼女のボテ腹も、見知った顔も、よく見えた。
「あ、秋霞ちゃんっ!?　いやっ！　あんっ♥　見ないで！　あっあんっ、突いちゃ、だめぇ♥」

「先輩!? どうして……!?」
彼女――春光(シュンコ)はふわふわの栗毛のイヌ娘だ。癒し系のお姉さんタイプで秋霞(アキカ)とは対照的に胸は大きい。署内でも人気が高かった。秋霞とは、一時はバディも組んでいたことがある仲。おっとりとしていながらも、その実、芯があり尊敬できる先輩だった。
その彼女が、どうして、夫でもない男に抱かれて、よがり声をあげているのか。
理解ができなければ、想像もしていなかった光景に秋霞は後退る。
そのとき、男が言った。
「ちょっと待っていてくださいね。すぐ終わりますから」
それからは目を離すことができなくなった。
春光は知人の視線を前に一度は羞恥が勝ったようで、瞼を閉じ、唇を結んだが、しかし――ぱちゅんぱちゅん、と、繰り返し繰り返し、濃密な粘液の混じり合う音と、肉と肉のぶつかり合う音とが響くにつれて、
「あっ、あぅん♥ はっあんっ♥ あっあっ♥ んっ、あぁぁっ♥」
口元はとろけて淫靡な嬌声を零し、両目に宿した淫蕩の色を曝していく。
丸みのある耳はぺたんと倒れ、背後で踊る尻尾が見える。
「んっんっ♥ はっあぁっ♥ きもちいい♥ あっ♥ やっぱり、これがいいの♥ わたしを、孕ませた、おチンポ♥ これじゃなきゃ♥ 雌イヌまんこの、夜泣きがすごいの♥ あんっ♥

赤ちゃんイヌもぉ、パパのお迎え棒で、よしよし、して欲しいってぇ♥」

その言葉に秋霞（アキカ）は目を見開いた。

「せ、先輩！　なんで!?　旦那さんと、あんなに仲良く……！」

春光（シュンコ）は、そういえばいたんだった、とでも言いたげな顔を一瞬だけ見せて、

「あっ♥　あっ♥　愛してる、愛してるよ♥　で、でもぉ、しかたないの♥　子宮が、あん♥　孕ませてって♥　あっん♥　このチンポで、孕みたいって、言うんだもんっ♥　あっあっ♥　あなたも、わかるでしょう？　はっんっ♥　わかる、はずよぉ♥　んあっ♥　あっ♥」

「な、なにを言ってるんですか、先輩……」

孕んだことで大きく膨らんだ乳房が、ぶるんぶるんと弾む。温泉旅行を共にしたときなどに見た、薄紅色の乳頭は面影なく、ビンビンに勃起したそれは、黒色に近い。時折ピュピュッと母乳が噴いた。その甘いミルクのような匂いはすぐに、雄と雌の卑猥な匂いに溶けていく。

秋霞の鼻は、わずかに二人の獣臭が増したのを捉えた。

（あ……イクんだわ。托卵浮気セックスで、私に見られているのもお構いなしで）

春光がカチカチと歯を鳴らす。

「あっあっ♥　あなた、ごめんなさい♥　ほ、本当のパパチンポに　イカせてもらうね♥　あっひっ♥　おっ♥　お腹の娘ちゃんに、ママのマジイキ教えちゃうね♥　ねっ、ね、娘ちゃん♥　あなたも将来、優秀なイヌ娘になって、あっ♥　優秀な、おふっ♥　種付けチンポ♥　ご褒美

まんこしてもらいたいよね♥　い、今のうちから、おほっ♥　立派な雌イヌになる勉強よ♥
あっ♥　おっ♥　おほっ♥　イクっ♥　胎教アクメきめさせて♥　おっおっ♥　イクイグっ♥
雌まんこ、まんこまんこっ　チンポぉ♥　――おっおふぉぉおぉぉっ♥」
――びゅるっびゅるるるるっ！
男のものが爆ぜたのが、秋霞（アキカ）にはにおいでわかった。
みっともなくイキ散らかした春光（シュンコ）の雌臭をも塗りつぶす、野性味の溢れる雄のにおい。
それは夫のものとは段違いだった。
男が彼女の中から、吸いついてくるマンコを物ともせずに、チンポを引き抜く。黒光りする剛直には、まるで刀のような恐ろしさがあった。春光の淫裂から、塊となってごぽりと垂れる精液を見れば、その量の尋常でなさがわかるというものだが、
（な、なんで、あんなに出して、硬いままなの……？　それに……大きい……！）
秋霞の尻尾は心なし、先っぽが丸まり、足の間に入ろうとしていた。
男は裸の上に白衣だけを引っ掛けると、チンポを揺らして秋霞に歩み寄る。チンポにばかり気を取られていたが、良い体格をしている。顔もヒトの社会ではイケメンに分類されるだろう。
「池治（いけじ）です。驚かせてしまったようで申し訳ない」
「あなたは……あなた、なにをしたか、わかっているんですか!?」
「まあ、まあ。落ち着いてください。これも血統保存の一環なんですよ」

「は、はあ!?」
「こういう方法もある、ということです。だから同意の上なんですよ。まあ、彼女の場合は、ご覧の通り、すでに孕ませた後ですから、今日のことはアフターケアのようなものですがね。いや、時間が被ってしまって申し訳ありませんでした」
男は実際、なんの悪びれた様子もなく、そう言った。
未だ理解に苦しむ秋霞を気にも留めず「で」と、チンポを小さく弾ませる。
「えーっと、東雲秋霞(しののめアキカ)さん、でしたっけ。貴女は、どうします？　望むなら――」
秋霞は思わず平手打ちを見舞った。
しかし、それは難なく彼の手に捕まれてしまう。
「危ないですねぇ」
そのまま軽く引っぱられると膝がガクンと崩れ落ちた。
跪く秋霞の眼前にはチンポがそそり勃(た)っていた。
雄のにおいを間近に吸って、頭がくらくらしそう。
秋霞は「なんで」と力なく言葉を零す。
どうして平手打ちが、思ったように放てなかったのか。
イヌ娘は人間よりも力がある。本気は流石にまずいと思っても、この、先輩を汚した失礼な男には、だいぶ痛い目を見てもらうつもりだった。なのに現実は、へろへろとのろまな動き。

春光（シュンコ）の痴態という悪夢のような光景を見たことで、精神的ショックがあったのだろうか。
チンポ――もとい池治（いけじ）が言った。
「本能ですよ」
「な、に……？」
「本能が俺を、服従すべき存在と感じたんです。たいていのイヌ娘は、そうなってしまう」
「なにを、馬鹿な」
「最初に去ろうとしたとき、俺の待てに従ったのも、そう」
「ち、違います……！　先輩が心配だったから」
池治が軽く腰を揺らし、チンポで秋霞（アキカ）の額をペチンと叩いた。
「こんなことをされても逃げない、反撃しない。俺のほうが上だから」
秋霞はくんくん鼻をひくつかせる。
「そ、そんなこと言って」
――ペチン。
「私が。……くんくん♥」
――ペチン。
「ほ、本気を出したら。……すぅ♥　はぁ♥」
――ペチン。

「こんなもの。……くんかくんか♥」

――ペチン。

「ぶ、ブチンよ、ブチン。……ふっ♥　ふぅ♥」

――ペチン。

「わ、わかってるの!?　……すぅぅっ♥　はぁぁっ♥」

チンポで叩かれながらも気丈に振る舞い、そして時折、鼻の穴を膨らませる秋霞(アキカ)。

池治(いけじ)はくつくつと喉で笑った。そして彼女の鼻をつまむ。

秋霞が思わず口を開けば、そこへ、チンポが這入(はい)ってくる。

「んぶむっ!?」尻尾がピーンと立ちあがる。

同時に鼻を解放され、彼女は、つい深く吸い込んでしまった雄のにおいに脳を揺さぶられた。

男を見上げる。彼には臆する気配など、さらさらなかった。もしも秋霞が本気でそうしようと思えば、噛みちぎることなど容易いというのに。たとえ、そうなったとしても意に介さないのではないか。そう思わされるほどの圧がある。

なんて勇猛で尊大な男だろう。

今まで会ったことのないタイプだった。

（こ、これが、雄！　雌(私)を孕ませる存在！）

秋霞は背筋をゾクリとさせた。

（――って、なに馬鹿なことを！）
思い直してすぐ、顎に力を込めようとしたが、どういうわけか動かない。
突き立てるべき歯を唇で遮って、もごもごと肉棒を食んでは、愛撫のようではないか。
「よしよし、いい子だ。お前を孕ませるチンポだぞ」
男の両手が、頭を掴んだ。
（あ……やめて、やめて）
声なき抗議など通じるはずがなく、男はゆっくり腰を前後に動かし始めた。
「んっ、んぶ、んっんっ、んむっ」
秋霞（アキカ）は目を瞑り、じっと耐える。決して自らは首も舌も唇も動かさない。
もっとも、そんなことがなにかの抵抗になるとは、欠片も思えなかったが。
（うあぁ……口をいいように、チンポしごき穴にされてるのに！　ど、どうして、動けないの。……ひどい味。ひどい、におい。あの人のとは大違い。臭くて、濃くて、いやらしい……）
やがて口内で溜まりに溜まった唾液が溢れ、顎を伝って垂れていく。
「んぐっ、んぢゅっ、んっぶぅ、んっんっ、ぢゅ、んむっ、んぐっ」
竿がぐぐっと太さを増した。
（あぁっ、くる！　射精！　精液！　口の中に出されちゃう！）
秋霞の鼓動が高鳴る。それはきっと、嫌悪からだと思った。夫以外の男のチンポのために、

口を好き勝手に使われ、ザーメンをコキ捨てられるのだから。他にどういう理由があるだろう。

男は腰を更に激しく振った。

喉の奥を亀頭がゴンゴン突いて、頭が揺れる。えづきそうになるのを、そのピストンで無理矢理に抑え込まれる。自分の体なのに一切が自由にならない。彼に支配されているような錯覚。

「んむっ、ぶふ、ぢゅる、むぶふぅっ、んぐっ、んぶっ、んぐっ」

尿道の膨らむのを唇で感じた、次の瞬間、

「んぐっんんっん――っ!!」

精液が喉奥で爆発した。

秋霞(アキカ)は尻尾をピーンと伸ばした。

どろり。ねばついて、熱いものが胃に落ちていく。チンポ以上に野性に溢れる味とにおいが食道に充満している。それは脳にまで染み渡るような強烈さだった。鼻に押し付けられた雄の陰毛も、その後押しをする。精を吐き出すチンポが、どくんどくんと脈打つたび、秋霞も体を痙攣させた。

二度目の射精を終えて、なお硬いままのチンポが、精液の糸を引きながら離れていく。

秋霞は「けぷ♥」と小さなゲップをし、顔を真っ赤にした。

「あ、あなた!」

羞恥を振り払うように、池治(いけじ)を睨みつける。

「あなた、いったい、なにをしたか、わかって――！」
だが彼は秋霞（アキカ）になど眼中になく、いつの間にやら傍に来ていた春光（シュンコ）と舌を絡ませていた。
秋霞は精液臭い唇を、わなわな震わせ立ちあがる。
その去ろうとする背中に、池治（いけじ）は言った。
「来週、また来てください。検査結果次第、採卵しますので」
誰が来るものですか――言葉に出さず、出口へ向かう。
部屋の扉を閉めるとき、敬愛する先輩の媚びた声が聞こえた。
「くぅん♥　くぅん♥　先生ぇ、はやくぅ♥　雌イヌ妊婦のパコパコ胎教の続きぃ♥」
秋霞は、自身の秘処が湿った音を立てるのを感じながら、病院を後にするのだった。

◇

その夜、秋霞は、あの男のことを忘れるためにも夫を夜の営みに誘った。
もちろん、彼には今日のことを話してはいない。言えるわけがない。
訴えるつもりもなかった。
秋霞は自身のことも、春光のことも胸に秘めると決めていた。
夫のチンポを改めて見て、思う。

あの男のものと太さや大きさは、そう変わらない。
（まあ……少しは、ね。でも、ほんの少しよ）
なのにどうして、あのとき彼のほうが遥かに大きいと思ったのだろう。
（やっぱり、におい……とか）
それから色だろうか。夫のほうは、亀頭もピンク色に近くて可愛い。
あの男のような威圧感がないのだ。優しい、おチンチンだ。
秋霞（アキカ）は、夫のチンポに「ちゅっ♥」と啄むようなキスをする。
（克彦（かつひこ）さんと同じ。決して女を、力尽くで屈服させたりなんかしない）
いつも以上に熱心にキスの雨を降らし、パクリと咥え込む。
夫が微かに声を漏らす。秋霞は嬉しくなって、尻尾を左右にゆらゆら振る。
「ちゅ♥　んぢゅ♥　れろ♥　んれろ♥　ぢゅる♥　……あなた、きもひいい？」
鈴口をチロチロ舐めてあげながら夫に伺う。
「あ、あぁ、もちろんだよ、秋霞さん」
「いつでも射精（だ）してくれて構いませんからね。もっと、感じてください」
あの秘め事の償いをするかのように、秋霞は奉仕を続ける。
「ちゅっ♥　れろ、れろ♥　れろっ♥　ぢゅる♥　れろれろ♥　ちゅっ♥　んれろっ♥」
「――ううっ、射精（で）る！」

やがて彼が達した。
口の中を跳ねる精子たちは、あの男のものと比べて薄い気がした。
いつもならティッシュに吐き出すところ、今日の秋霞(アキカ)は、そのまま飲み込んだ。
夫は驚いたようで、
「大丈夫かい？　そんな、無理しなくても」
秋霞は微笑みを返した。
「男の人は、こうすると喜ぶ、と……その、友人が」
彼は照れ臭そうにしながら秋霞の頭を撫でる。
その流れでキス。胸や尻への愛撫と続く。
夫のものが回復するには、もう少しだけ掛かるのだ。
不満はない。この、ゆっくり愛し合う時間は、とても大切だと思う。
ただ、今日の秋霞はやはり、いまいち没頭できなかった。
甘い喘ぎ声を出しはするけれど、それに反して、罪悪感で胸いっぱいだった。
(あの男のよりも飲みやすいし……なんて)
そんな言葉が、ほんの一瞬でも頭を過ったことを、心の中で謝る。
再び夫のチンポが硬さを取り戻してくると、秋霞はゴムをつけてやり、彼の上に跨った。
珍しいことだった。無意識のうちに避けたのだろう。

夫が責める側では、今日の、あの男の責めをきっと思い出してしまうから。
秋霞(アキカ)は舌を絡ませながら、あそこに彼を導いた。
「おチンチン、硬くて、んっ♥　すてき……あっ♥」
「僕も気持ちいいよ。でも、本当に今日は、色々してくれるね？」
「んっ♥　あっ♥　……いや、でした？」
「ううん。そんなことないよ。嬉しい」
「なら、よかった。あっ♥　あっ♥　んっ♥」
秋霞は夫の胸板に顔を埋めながら、一生懸命に腰を振る。
肉と肉のぶつかる音が、たんったんったんっ、と大きく鳴る。
「克彦(かつひこ)さん♥　克彦さん♥　克彦さぁん♥」
「う、う、秋霞さん、激しい！　ごめんっ、もう！」
「あっあっ♥　待って、もう少し、もう少しぃ♥」
スパートを掛けてからも、彼は充分に堪(こら)えたと言えよう。
「んっ♥　あぁぁっ♥」
おかげで秋霞は、夫の射精と同時に絶頂を迎えることができた。
（よ、良かった……ちゃんとイケた……）
イヌ娘の体力的にはまだまだ出来るし、彼とて若い。もう一回くらいなら可能だろう。明日、

仕事がなければの話だが。いつも通り、あとはピロートークの時間となった。
普段の秋霞(アキカ)なら、充分に満足していた。
なのに、その夜はどういうわけか、いつまでも体の疼きが止まらなかった。
数日を経て、夫との愛の営みを繰り返しても……日に日に、それは増していく。
とうとう秋霞は「少し頭が痛くて」と、小学生のような仮病を使った。
心配そうにしながら出勤する夫を見送り、寝室へ。
「……はぁ♥」
熱い吐息を漏らす彼女の手には、タオルが抱えられていた。ベッドにそれらを敷くと、身をまとう全てが煩わしいとでも言わんばかりの勢いで脱ぎ捨てる。タオルの上に座って、早速、股の間に手を伸ばす。そこは夫を見送る前から濡れていた。結婚した以上、必要ないと思っていた――実際、しないできた自慰。時間はたっぷりあるにもかかわらず、秋霞の指は最初から全力だった。すでにビンビンに勃起した乳首を、くにくに捏ね繰り回す。そして、もう一方の手はクリトリスの皮を剥き、敏感なそれを、愛液をまぶした二本の指で挟み、シコシコと擦りあげる。
「はっ♥　あっあん♥　あっ♥　はぁっ♥　んっ♥　あぁっ♥　いくっ♥　イッ、あぁぁっ♥」
燻っていた体は、瞬く間に絶頂を迎えた。
しかし、収まる気配はまるでない。

秋霞（アキカ）は、おマンコに指を一本、挿入した。
（……やっぱり、もう一本っ♥）
二本の指で、ぐちゅぐちゅに濡れた膣内の天井を掻くようにする。
じゅぷっ、じゅぷ、ぐちゅっ！
次から次へと溢れる愛液が尻を伝い、タオルに染み入る。
クリトリスを弄るのも忘れない。親指の腹で潰すようにして転がした。
「んっ♥　ぐっ♥　いっあっ♥　あっあっ♥　おあぁっ♥　またイクっ♥　イク♥　あっあっふっ♥　きもちいいっ♥　はっ、ひぁんっ♥　おっ♥　あっあっ♥　あぁっ♥」
両脚をぎゅっと閉じ、しばし震えたかと思えば「はぁぁっ♥」と溜息と共に足を弛緩。
秋霞は口角から涎を垂らすのも構わず、すぐにまた手マンを再開した。
「んっ、あっあっ♥　おぁぁっ♥　おぁぁっ♥」
三度目の絶頂では腰を大きく突き上げ、生まれて初めて潮を噴いた。
「あぁぁっ♥　で、出てる♥　出ちゃってる♥」
その余韻も覚めやらぬうちに――それどころか、ずっと甘イキを繰り返している――今度はうつ伏せとなり、尻を上げて、蜜壺をぐちゅりぐちゅりと掻きまわす。
「んふっ♥　んふーっ♥　あぁぁ♥　きもちいぃぃ♥」
鼻息荒くして浅ましい顔で自慰行為に耽る様に、黒疾風（くろはやて）とも呼ばれる敏腕刑事の面影を見て

取れる者は、ほとんどいないに違いない。自慰を覚えたてのときだって、こうはならなかった。むしろ自制心こそ育ったものだ。夫との行為のときさえ、いや、だからこそ、ここまで馬鹿に恥を曝すようなことはない。

今は完全に、たがが外れてしまっていた。

「あっ、あぁっ♥　あっんぅ♥　だめっ、だめぇ♥　そんなこと思っちゃ、いけないのに♥　でも、あっあっ♥　んんぅっ♥　あっあん♥　あなた、ごめんなさい♥　あっあっ♥　ごめんなさいっ♥」

秋霞（アキカ）は一回目、二回目の絶頂のときは、なにも考えないようにしていた。ただ無心でイケば、それで体も静まると思っていたのだ。だが現実にはイクたびに、池治（いけじ）という男のチンポの熱さ、におい、喉を通る精液のねばつきが思い返され、余計に下腹部――子宮がキュンキュンと疼く。

「あっ、んっ♥　ふっ♥　こんなこと、いけない、いけないのにぃ♥　どうして？　んんっ♥　あぁぁっ♥　夫を愛しているっの……あ、愛しています、克彦（かつひこ）さんっ。本当よっ。あっ♥　本能、なんて、馬鹿馬鹿っしい♥　打ち克たなくちゃ、なのに、なのにぃ♥　あっ、だめっ♥」

あの男との子供を孕みたいと、体は切に訴えていた。

せめて言葉にはしないようにと、秋霞は枕に顔を埋める。

「んんっ♥　むふっ♥　んふっ♥　んっ♥　んふーっ♥　んっんっんっ♥」

秋霞の尻尾がピーンと真上に伸び、爪先がぎゅっと丸まる。

枕の下では涙を流し、おマンコからは潮をプシャァァッと飛び散らせる。
結局、秋霞(アキカ)は昼過ぎまで自慰を続け、その後は夕方になるまで眠りこけた。
あの男のチンポを思い、何度、イキ果てただろう。
わからなかった。
翌日に病院への再訪を控えた日のことだった。

◇

ロングスカートの裾をはためかせ、秋霞は病院の玄関をくぐった。
来たくはなかった。けれど……。
地下へと降り、恐る恐る、池治(いけじ)のいる部屋に入った。
彼が服を着ていることに安堵した。前回のように他に女もいなかった。
「特に問題はありませんでした」
淡々と、前回の検査結果を告げられる。
「健康状態は良好ですね。流石です」
そして秋霞の予想に反して、
「では検査室のほうで卵子の採取を。それが済んだら、お帰りになってください。血統保存は

以上になります。お疲れさまです」
と。どこか、つれなく言い放たれた。
「ま、待ってください」
そんな言葉が口をついて出ていた。
「なにか？」
「え……と……そう！　春光（シュンコ）先輩のことです。あんなことをして、許されると思っているのですか？」
「前回も言いましたように、互いに同意してのことですから。卵子保存だけでなく、研究所の認めた優秀な血統を後世に遺したい、と。彼女の希望です」
「優秀な、血統」
思わず喉を鳴らし、秋霞（アキカ）は彼の股間に視線を落とす。
優秀な血統との子作りを認められた彼もまた、優秀な血統の持ち主に違いないのだ。
では、研究所も認める彼の優れた点とは、なにか。
今の秋霞は本能的に理解していた。
――生殖能力。極めて単純な、生命としての強さ。
次代に血を遺すことを第一に考えれば、これほどに求められる優秀さは、ないだろう。
「秋霞さんも、もしも気が向いたら、いつでも、ご相談に乗りますよ。我々は」

「でっ、でも！　先輩には旦那さんがいるのよ!?　なのに、そんなこと」
池治(いけじ)が、ぷっと失笑する。とても馬鹿にしたように。
「貴女も前回、俺のチンポをしゃぶって感じていたじゃないですか」
赤面し、わなわなと唇を震わせる秋霞(アキカ)。
「失礼、秋霞さん。いや、しかし、貴女は立派ですよ」
「な、なにが！　なんの話ですかっ！」
「春光(シュンコ)なんかは俺がチンポを見せた途端、尻尾ブンブン振って服を脱ぎだすようなバカイヌでしたからね」
言いつつ彼は立ちあがる。
秋霞はドキリとして目で追う。
彼は背後からスマホの画面を見せてきた。
そこに映るのは、真っ裸になった春光が、がに股で腰を前後に振る様だった。
『せ、せんせぇ♥　種付けっ♥　して、してぇ♥　先生の一流チンポで赤ちゃん仕込んでぇ♥　わたしの卵子、ぜーんぶっ、先生にあげちゃう♥　捧げさせてください♥　わたしたちの血を継ぐ優秀な赤ちゃんだけ孕みたいのぉ♥　先生のチンポで、わたし、鈴木(すずき)春光を繁殖おまんこ娘にしてくださーい♥』
秋霞の心臓が早鐘を打つ。

池治(いけじ)はスマホを仕舞うと彼女の肩に手を置き、耳元で囁いた。
「お前も孕みたいんだろう？」
秋霞(アキカ)はチラチラと後ろを気にしながらも、決して彼の手を払い除けたりはしなかった。
「ち、違います……また来るようにと、言われたから」
「あんなことをした男の命令に、嬉々として従ったわけだ」
「……ら、卵子保存のためです！」
首筋にじんわり汗が滲む。耳はヒクヒク動き、尻尾も今にも振り始めそうだった。
池治の手が、するり、襟元から這入ってくる。
「ちょ、ちょっと！　やめ、なさい」
言葉とは裏腹に抵抗は最低限。彼の手首に、己の手をそっと添えるだけ。
池治は彼女の、すでに勃起した乳首を指先でピンピン弾いて笑った。
「こんな襟の開いたシャツを着て……下着も、なんですか、これは。穴開きじゃないですか」
秋霞は、そっぽを向いて耳を赤くする。
「夫のために、買ったものです！」
それは本当のこと。けれども踏ん切りがつかず、ずっと死蔵していたものでもある。
なんにせよ、それをなぜ今日このときに着けてきたのか。
その理由にも、言い訳にも、なってはいなかった。

「期待してたんだ？」
男が、もう一方の手を腹のほうから入れてくる。
両方の乳首をピンピン弾かれたかと思えば、カリカリ引っ掛かれ、秋霞（アキカ）は体をくねらせた。
「んっ、あ♥　やめ、やめなさっ♥　あっあん♥」
「触る前からビンビンに勃（た）たせていて、よくもまあ」
「うそ♥　嘘です、そっんなことはぁ♥　――ひぃんっ！」
突然、胸先に鈍い痛みが走った。指で挟んだ乳首を、ぎゅっと潰すようにされたのだ。
嘘つきはお前のほうだと、咎められている気持ちだった。
「あっうぅっ♥　ごめんなさいっ。部屋に入る前から、乳首勃起させてましたぁ！」
まるで躾だ。
素直に白状したら、いいこいいこと可愛がる代わりに、媚豆を優しく転がされる。
「んっふ♥　はっ、あぁ♥　んっんっ♥　あっ♥」
痛みで鋭敏となったところに、それは甘美な痺れとなった。
逃れるように秋霞は背中を丸めていく。しかし当然、そんなことは無意味だ。
クリっクリっ、カリカリ、ピンピンピン。執拗に乳首だけを責め立てられる。
「はっ、あっ♥　んっ♥　いっ♥　あっあっ♥　あっ♥　あぁっ♥　あっ♥　ん――っ♥」
痙攣。そして脱力。達したことは明らかだった。

（ち、ちくび……乳首だけで、イカされた……♥）
夢見るような目で「はぁ♥　はぁ♥」と荒い息を吐く秋霞（アキカ）。
池治（いけじ）が、裸になるように命じた。
彼女は黙ったまま、その通りに。躊躇いがちに、そうしたつもりだったかもしれない。だが傍目には、逸る気持ちを抑えながら、にしか見えなかったことだろう。
さらりとした長い黒髪がベッドに広がる。なだらかな双丘は、ゆっくりと上下を繰り返し、その頂点に小さく実る薄桃色はジンジンと痺れている。細い腰に、肉厚な太もも。股間からは、すでに多量の愛液が溢れ、内股を淫らに光らせていた。
池治が全裸となって顔に跨る。
そびえる男根の黒光りし、なんて雄々しいこと。
唇に、二つの金玉が圧し掛かる。
（重い……♥）
彼がスマホのレンズを向けてくる。
先ほど見せられた、春光（シュンコ）先輩の様を思い出した。
「それでは、秋霞さん。同意してもらえますか。書類のほうにも後でサインしてもらいますが。というか、そちらのほうが正式ではありますけどね。些末事は落ち着いてからが良いでしょう？」
秋霞は鼻で笑い、

「し、しないと言っても、するつもりでしょう？　こんなに……ゴク……おチンポ硬くして」
彼は、ふぅ、と溜息をついた。
「したくないのなら構いませんが」
「――え？」
目を丸くする彼女に、池治（いけじ）は冷めた視線を返す。
「血統保存は採卵で充分です。個人的な性欲は他の愛玩雌（ペット）で良い。秋霞さんとする理由なんて、俺にはありませんよ」
ここが分水嶺。そう言っているのだ。
道は二つに一つ。全てを胸に秘め、ただの人妻に戻るか。それとも……。
（そ、そんなの、決まっているわ）
頬が熱い。その熱は果たして自身のものか、顔の横のチンポのものか。
秋霞（アキカ）はチンポをチラチラ見ながら、唇を開いていった。
「わ、私は克彦（かつひこ）さんを、あ、愛しています。それは、変わらない……わ。克彦さんとの子供だって、もちろん、う、産みたかったし、産むつもりだった」
だけど――と、彼女は両手を下腹部に伸ばして、
「子宮が、違うって言うの。このチンポだって。東雲（しののめ）秋霞を孕ませるのは、こっちの、この、チンポだって。……あの人のと、たいして変わらないのに、でも、ちがう。全然、違うのよ。

においが、違うの♥　精液の濃さ♥　金玉のデカさも♥　あの人のとは、ぜんっぜん、違う♥」
チンポに鼻を擦りつけ、深く、深く、雄臭を吸い上げる。
「すぐに、わかってしまった……。これが雌を孕ませるチンポなんだって♥　色だって黒々としていて……どれだけの雌に、た、種付けしてきたのか、わからない。きっと、たくさん♥
克彦さんとの赤ちゃんも産めたらいいけれど……アリバイ作りにセックスはするけれど……きっともう……ら、卵子が、選んでくれない！　だから……っ♥」
秋霞は涙を流し、微笑んだ。
その手はさっきから、おマンコをくちゅくちゅと弄っていた。
今すぐにでも挿入れてもらえるように。
「ごめんなさい、克彦さん。――私、東雲秋霞は、私の子宮は彼の優秀な種付けチンポで♥
卵子も認める強い雄精子で♥　孕ませてもうことに同意します♥」
池治はスマホを置くと、体を反転させる。
秋霞の顔にチンポを擦りつけながら、淫裂に指をねじ込み、ぐちゅんぐちゅん、掻きまわす。
「あっ♥　おっ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポがいい、のに♥　おマンコ待ってるのにぃ♥」
秋霞は竿に舌を這わせて鼻息を荒くする。
彼の我慢汁で、その鼻先はぬらぬら照り始めていた。
「へっ♥　へっ♥　チンポぉ♥　すぅーっ♥　はぁーっ♥　くっさ♥　あつぅい♥　金玉も、

グツグツ精液、煮立ってる♥　ドクドクいってる♥　これっ♥　これ、膣内(なか)に射精(だ)されたら……♥」

親指がクリトリスをぐりぐり回すように、こねる。

「んっ♥　あぁ、あっ♥　やっ♥　イキそ♥　イッちゃう♥　チンポのにおい嗅ぎながら♥　はぁっ♥　すんすん♥　指で、イカされる♥　夫以外の、好きでもない男に、イカされる♥　だめっなのにぃ♥　あっあっ♥　もう、だめ♥　あっあぁぁあっん♥」

膣がぎゅうっと締まった。

彼が指を引き抜くと、ちゅぽんっ、と小さな音が鳴った。

池治(いけじ)が体の上から退く。秋霞(アキカ)は、名残惜しそうな表情(かお)を一瞬だけ見せるも、その後のことを考え、すぐに期待から喉を鳴らした。捧げるかのように、自ら太ももを抱えて、淫蜜にまみれ、雌のにおい立ち昇る股を開け広げる。尻の下では、堪え性のない尾が右へ左へブンブン。

ニヤけた顔で媚びへつらう。

「チ～ンポ♥　今度こそチンポ♥　イキたてほかほかチンポしごき穴に、お精子ぶり撒いて♥」

「くくく。それが警視総監賞とやらを何度も貰った警察官のすることですか」

「だ、だって、あなたのチンポがいけないんじゃない♥　どんな凶悪犯にも立ち向かってきたけれど、ヒトよりも、ずっと力もあるけれど、それでもこのチンポには勝てないのよ♥　雌の本能が屈服しちゃったのよっ♥　でも心は別よ♥　愛しているのは、夫だけなんだから♥」

ヒクヒクと蠢く雌穴に、痛いくらい勃起した雄チンポが、あてがわれる。それだけで秋霞（アキカ）のマンコはちゅっちゅっと吸いつくようだった。限界ギリギリまで気丈に振る舞っていた彼女も、だからこそかもしれない、今や春光（シュンコ）と同じか、それ以上に浅ましい。全身で雄に媚び、雄を喜ばせ、雄に奉仕する、一匹のバカ雌イヌに成り下がっていた。

（チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥　チンポ♥）

夫への愛を恥ずかしげもなく口にしながら、事実、夫以外の男に抱かれんとする今に、これまでにない多幸感を覚えている。そして、それはまだ、幸福なる生の始まりに過ぎないことを予感しているのだ。

ずぷり、ずぷり――ゆっくりとチンポが淫裂を押し分けてくる。姿形こそ夫のものとはそう変わらない。なのに夫以上に鮮烈な快楽が、秘処から全身へ流れていく。秋霞の三角形の耳がピクピク震える。

「くるっ♥　くるっ♥　生チンポ♥　無防備マンコ犯されるっ♥　夫にしか許しちゃいけないのに♥　種付けっ♥　繁殖交尾っ♥　孕ませぇックスぅ♥　夫以外とパコパコしちゃう♥　夫以外のチンポで、おマンコ、イカされる絶対♥　強い雄精子で卵子輪姦（まわ）されちゃう♥」

――ずぷんっ！

いきなり最奥までチンポが来た。

秋霞は顎を反らし、両脚と尻尾がピーンと伸びきった。

「あっ、あぁぁ〜〜〜〜っ♥」
膝から、やがて力が抜けていく。
顔は涎を垂らすほどにとろけ、耳もぺたんと倒れていた。
「あひ♥　あへ♥　はいっちゃった♥　こんなの、はじめて♥　すごい♥　チンポ、すごい♥」
蠢く膣道、キュンキュン絡みつく猥褻（わいせつ）を、孕ませ棒がずりずり引き剥がしていく。
そして隅々まで探るように、媚びる淫肉を甘やかすように、再び挿入（はい）ってくる。
「うひっ♥　ひっ♥　あっんぅ♥　はっあっ♥　はっ♥　へっ♥　あぁっ♥」
秋霞（アキカ）は頬に両手をやって、うっとりとした目で、その様子に見入った。
「あっあっ♥　そこっ♥　あっ、いいっ♥」
「ここ、ね」
「そうっ♥　そこ、そこ♥」
「秋霞」と彼は一段、低い声で「立場を弁えろ。いいところを、俺が突くんじゃあない。俺が、いいところを、作ってやるんだよ」
「はいっ♥　ごめんなさい♥　チンポっ♥　チンポに、托卵畑を作っていただきます♥」
種付けに特化した一流チンポが己を耕していく。夫との行為で出来上がった畑を、ひっくり返していく。腰を掴む手に下腹部をぐにぐにとマッサージされ、子宮の疼きが、どんどん酷くなる。排卵を促されるかのようだった。実際のところ、今日は安全日だ。それでも秋霞は今日、

孕む気がしてならなかった。
鼻先にチンポを突きつけられた時点から、胎(はら)は受精の準備を押し進めている。
そんな気がするのだ。
（あなた、許してください♥　私は本当に、あなたの子を産みたいのよ♥　でも子宮と卵子が、こっちがいいって♥　このチンポの言いなりなんです♥　だから絶対、卵子でちゃってる♥　雄精子、お出迎えしちゃう♥）
そう望んでいるのは、本当に体だけだろうか。
なにはともあれ、今日の結果が判明するのは、しばらく先のこと。
もっとも、いずれは叶うに違いないが。
「あっ♥　おっんっ♥　はっ♥　んっ♥　あっ♥　いっ♥　ひっ♥　あっ、んっ♥　あっ♥」
夫のものと、太さも大きさも長さも、そう変わらないはずのチンポが、夫では届かなかった子宮口までコツンコツンと小突いた。秋霞(アキカ)が妄想する卵子の出迎えはともかく、子宮のほうは孕ませ棒を求めて降りてきていた。いや、思い返してみれば、夫との行為でもそれはあった。数えるほどだが。しかし、もう二度と、ないだろう。これからは、雄にしか、この子袋は反応しないに違いない。
亀頭が奥まで来るたび、子宮口が吸いつくようだった。
ちゅぽんっと離れるたび、秋霞は軽い絶頂を覚えた。

「んっ♥　ふっ♥　あっあっ♥」

不意に彼が背中へ手を回してくる。抱き締める、というほど、愛情を感じるものではない。圧し掛かるといった趣だ。彼の胸板にビンビンに勃起した乳首がこすれて気持ちいい。互いの熱が溶けあい、一つになるような錯覚。

貪るような口付け。ぢゅるりぢゅるりと、淫らな水音が秋霞（アキカ）の頭蓋に木霊する。

「んふっ♥　んふっ♥　あへ、れろ♥　ぢゅぷ♥　れろえろ♥　ぢゅるるっ♥」

亀頭で子宮口をぐりぐり、こねくり回される。

開け、開け。明け渡せと言うように。

「ふあっ♥　んはっ♥　あっ♥　あ♥　それっ、それ♥　やっ♥　あんっ♥　へんに、なる♥　んん♥　あっ♥　甘イキ、つづいて♥　おっ♥　大きくなって♥　んぅ、ちゅっ♥　むぢゅっ♥　んむっ♥」

彼はそのままチンポを振動させる。

ブルルッ、ブルルッ！　ブルルッ、ブルルッ！

「んんっ♥　んんーっ♥」

初めての刺激に秋霞は目を大きく見開いた。

両脚を彼の腰に回す一方、両手は彼を押し上げる。

「ぢゅるっ♥　むはっ♥　あっ♥　はっ♥　だめ♥　あぁっ♥　これっ、本当に、だめっ♥

マンコ堕ちる♥　堕ちるっ♥　おちぃっ♥　雌の本能に服従するだけじゃ、あっあっ♥　なくなっちゃう♥　いや♥　あっ♥　あっ♥　おっ♥　恋しちゃう♥　チンポに恋しちゃうぅぅ♥　恋マンコになるぅぅっ♥」

本能に従属し、池治（いけじ）という雄に屈服し、どんなに浅ましい雌イヌになろうとも、夫である克彦（かつひこ）を愛していることには、決して変わりがない。夫の側からは、そう見えないとしても、だ。

しかし、今、その愛が、夫が雄でなくても変わることのなかった愛が、絶対的な雄によって犯されようとしていた。秋霞（アキカ）にとって越えたくない、越えてしまってはいけないと思う最後の一線。それが侵されようとしていた。

池治は、胸板を押す秋霞の手を取り、ベッドに押し付ける。

そうして圧し掛かると、舌を、口内を、更に激しく貪る。

「んふっ♥　ぢゅるれろっ♥　ふぁ♥　んっ♥　んふふーっ♥」

チンポがぴったりくっついたまま、子宮口を小突き、抉り、震える。

秋霞は尻尾を幾度となくピンと伸ばし、痙攣する。小さなアクメの連続は、重ね合わさり、増幅しながら蓄積していく。その爆発のときを今か今かと子宮は待ちわびている。

秋霞は必死に夫との思い出を振り返り、せめて、この愛だけは犯させまいとしていた。

（克彦さんっ、今年の誕生日プレゼントの（チンポ♥）本当に嬉しかった。結婚旅行で行った

（チンポ♥）また行きたい。そうそう（チンポ♥）ーズのときのレスト（チンポ♥）も、また、行こうって（チンポ♥）してた。克彦（かつひこ）さ（チンポ♥）（チンポ♥）かつひ（チンポ♥）助け（チンポ♥）（チンポ♥）（チンポ♥）（チンポっ♥）愛して）

ぐりっ――と、雄々しい亀頭が起爆子宮スイッチを押し潰す。

瞬間、秋霞（アキカ）は頭が真っ白になった。

「んぶっぶ、んぶぶふぅぅぅぅ――っ♥」

――ブシャッブシャァァァァッ！　盛大に潮を噴く。

同時に膣道はチンポの力強い脈動を感じ、子宮は白濁として熱いものを、

――びゅくっびゅるるるるっ！

と、注がれる。

秋霞は何度も体をビクンッビクンッと跳ねさせた。収まっていくにつれてピンと張りつめた耳と尾、彼の腰に回していた脚の力が抜けていく。全身がだらりとなったところで、ようやく、池治（いけじ）は唇を解放してくれた。唾液の糸が何本も、きらめいていた。

危惧していたほどには、夫への愛は変わらなかった。彼の優しいところも真面目で正義感のあるところも、変わらず愛している。ただ、あのピンク色した亀頭や愛撫したときの彼の反応などは、もう、可愛らしいとは思えそうになかった。

雄の魅力、本能のもたらす抗い難き情動は、心と体の奥底に刻み込まれたのだった。

（ごめんなさい、克彦（かつひこ）さん♥　私……恋マンコにされちゃった♥　本能と心で、池治（いけじ）チンポ様に尽くします♥　でも、おマンコ以外は、あなたの妻のままで、よかった……♥）

池治は、一回の射精程度では萎えないチンポを、頭も顔もとろとろになった秋霞（アキカ）の、ぐじゅぐじゅマンコにぶっ挿したまま背面座位の格好に持っていく。小ぶりな胸を揉みしだきながら、下からガンガン突き上げた。

「んおっ♥　おほっ♥　おほほぉっ♥」

「次、イクときも潮噴いてみせろ。さっきの勢い、卯波（ウナミ）や水仙（スイセン）とタメ張れそうだ」

「あっ♥　だ、だれっ？　おっ♥」

「そのうち会わせてあげますよ。で、遠くまで潮を噴けた雌から犯す。最下位は見てるだけだ」

「んっ♥　あっあっ♥　そんなの、ひどい♥　おっ♥　女を、おもちゃみたいにっ、にっ♥」

「敗けないように潮噴き訓練だ。今日はイクたびに噴け。わかったな？　バカ雌」

ズドンと深い一突きがあり、秋霞は返事の代わりにアクメ声をあげた。

「おっおほおぉぉぉぉっ♥」

ブシャシャァァァァァッ！

恥知らずな潮噴きは真っ直ぐに、ベッドの端から端まで飛んでいった。

池治は後ろからも犯した。イヌ娘は、口さがない者には先祖返りならぬ獣返りと揶揄されることもあるが、まさに秋霞は獣になった気分だった。尻をバチンと叩かれ、狼のように鳴けと

命じられた。その通りに「わぅんっ♥　あおぉんっ♥」と喘げば妙に体の芯が痺れた。尻尾を引っ張られながら突かれると、背筋がぞくぞく震えたものだ。

「わうっ♥　あおっ♥　おぉんっ♥　おっ♥　あおおぉんっ♥」

いわゆる駅弁の体位でも犯された。彼に抱きつき、ゆっさゆっさと揺られる快楽は甘美で、少しはこちらを気遣っているのだろうか、と秋霞（アキカ）は思う。

「んっ♥　はっ♥　あぁ♥　んっ、ふっ♥　あんっ♥　――ぞっ♥」

ふと背中に硬い感触。壁のせいだ。

彼女がそれを認識するのに前後して、池治（いけじ）のピストンが加速していった。

「あっ♥　あっ♥　んぃっ♥　これっ♥　こわい、こわいぃ♥」

チンポに突き飛ばされた下半身が壁に当たって跳ね返る。そこを更にチンポが突く。

雌穴が繰り返し繰り返し小さな潮を噴く。プシャッ、プシャッ、プシャッ！

「おっほぉ♥　まんこ、こわれ♥　おっ♥　おひっ♥　まんこっ、ぎんこぉ♥」

子宮を潰されると思うほどの衝撃の連続。全身に迸る轟雷めいた快楽。秋霞が、ベロチュー種付けプレスをキメてもらったときのように、頭を真っ白に弾けさせるまで、そう時間はいらなかった。

秋霞は足と尾を真っ直ぐピーンと伸ばし、

「んぃぃぃおっおおおぉおっ♥」

彼の煮え滾るような生命の奔流を胎で感じながら、イキ散った。
呆れるほどに盛大な潮噴きが収まると、池治（いけじ）は挿入してから初めてチンポを抜いた。膣から、溜まりに溜まって塊と化した白濁液が、ごぽぽぉっと床に落ちていく。その上にへたり込んだ彼女とは対照的に怒張は未だ健在だった。アクメ漬けにされ、頭の中に星を飛ばす雌が、その雄々しさ、猛々しさに後光すら見てしまったとしても無理はないだろう。
亀頭の向いた先を、秋霞（アキカ）は目でぼんやり追った。
そこには小麦色の肌をしたイヌ娘が、驚きと好奇に染まった顔で座り込んでいた。見覚えがある。確か陸上において国内トップクラスの選手だ。
そして、この状況にも覚えがある。覚束ない頭で秋霞はそう思った。
これは自分が、春光（シュンコ）先輩の雌姿を目撃したときと同じだ。
彼女は、秋霞にも聞こえるほど大きく喉を鳴らし、彼の元へ這ってくる。口を大きく開いてチンポにしゃぶりつきそうになったところで、池治は鋭い声で制する。
「待て！」
イヌ娘は口を開いたまま、眉根を寄せた。
あと少しなのに！　という心の叫びが聞こえてきそうだった。
そのとき鈴口から精液がつーと糸を引いて落ちてくる。彼女は目を輝かせて舌を突き出し、受け止めようとした。残念ながら届かなかったが。

「んぅぅん♥」不満そうに唸り、涎をだらだら垂らすイヌ娘。
それを見て秋霞（アキカ）は、心底ホッとした。
先輩や自分だけではないのだ、と。やっぱり彼には――彼の存在（チンポ）が呼び起こす雌の本能には、誰もが抗い難いのだ、と。難事件を解決する知性を持っていようとも、凶悪犯に怯まぬ勇気があろうとも、頂点を目指してひたむきに努力する根性があろうとも。イヌ娘ならば、より強き雄に屈するもので、雌ならば、より感じるチンポに恋するものなのだ。
池治（いけじ）がくつくつと笑いながら「よし」と言った。
小麦色のイヌ娘は、陸上選手らしい反射力で、がっつくようにチンポを咥えた。
「ぢゅるっ♥　ぢゅぼぼっ♥　ぢゅるるるっ♥　ぐっぽぐっぽ♥　ぢゅぶっ♥　ぐぽ♥　ぐぼぽっ♥　ぷはっ♥　チンポうまっ♥　れろっれろれろ♥　まん汁、ザー汁まみれのチンポっ♥　えろうまチンポ♥　ぐぽぐぽ♥　ぢゅるへろっ♥　ぺろれろ♥　ぢゅぼぢゅるっ♥」
鼻の下を伸ばして頬をへこませる彼女を眺めながら、秋霞は、また挿（い）入れてもらう時を待ち遠しく、指で己の雌穴をくちゅくちゅと弄るのだった。

（了）